

第 8 章 紋別市立博物館

平山慎也

8.1 紋別市立博物館の概要

紋別市立博物館は、漁業開拓を紹介する「ハマ」、旧石器時代から現代に続く歴史を描く「オカ」、砂金・鉱石・金などの地下資源を紹介する「ヤマ」の三大テーマを基に、紋別の現代と過去の形を洗練された展示で紹介している。中でも、旧石器時代から江戸時代末に至る各時代の精巧に作られたジオラマや、実物大に復元された高野番屋は必見だ。その他、ゴマフ、ワモン、クラカケなどのアザラシ類やトド、オットセイ、キタキツネ、エゾモモンガのはく製、体長 6m のコイワシクジラの骨格標本などオホーツクに生息する動物たちも多数展示され、紋別・オホーツクの歴史を深く知ることができる施設である。

8.2 紋別市の歴史

紋別市の歴史を辿ると、1684～87 年に、松前藩がその直領としていた宗谷場所から斜里場所へ至るオホーツク海沿岸の寄港地として利用したのが始まりといわれている。

1869 年 7 月 8 日、北海道開拓使が設置され北海道の開発が始まり、その年の 8 月 15 日、北海道の様子に詳しい判官松浦武四郎の意見でエゾ地は「北海道」と命名され、太政官から北海道 11 国 86 郡が布告された。これにより、北見 8 郡のうち紋別郡が誕生し、続いて 1872 年 3 月に紋別郡の 10 ヲ村の村名が決まり、モンベツ村と呼ばれるようになった。「紋別」と呼ばれるようになったのは、1875 年 5 月に通達が出され、管内一斉に町村や港の名前に漢字を当てることになってからである。

1880 年には紋別村外 9 ヲ村戸長役場を設置し、以後、沿岸漁業の活性化や道路の開削、国鉄名寄線の開通により、人口が急増した。その後、1954 年 7 月 1 日紋別町・渚滑村・上渚滑村の 1 町 2 村の合併により、漁業・農業・鉱業を基幹産業とする人口 36000 人の「紋別市」が誕生した。1973 年東洋一の産金量を誇った鴻之舞金山が閉山したが、1975 年には紋別港が重要港湾に指定され、国際貿易港としての整備が進んだ。

近年では、国内唯一の氷海域であるオホーツク海の特性を生かし、冬季は流水砕氷船・ガリンコ号による流水観光、夏季は花観光や釣クルーズ体験など、四季折々のオホーツクの自然を利用した観光が楽しめる。

この章では、紋別市立博物館の展示をより楽しむために、まず紋別の地名の由来を知ること、北海道の歴史を紐解く上で外せない、アイヌとの関係性を見ていくとともに、紋別の歴史の代表ともいえる鴻之舞鉱山と高野番屋を紹介していく。

8.2.1 地名の由来

古文書には、紋別の地名はカタカナあるいは平仮名で「まうべつ、モベツ、トマリ」などと書かれ、漢字では「紋部津、紋部地、茂武遍津、紋辺津」などの文字が当てられていたが、前述の通り 1875 年 5 月の通達を機会に「紋別」の地名が定着した。

紋別の地名は、アイヌ語の「モペツ」（静かな川の意味）からきている。紋別市の中心地の地名が、川がないのに「モペツ」と呼ばれるのは不思議に思われるが、もともとは元紋別を流れている「藻鱚川」を指したもので、モペッコタンに住んでいたアイヌの人たちが付けた地名であるそうだ。

現在の紋別市街の方に番屋ができて、モペッコタンに住んでいたアイヌの人たちが移り住むようになり町並みができると、いつの間にか地名も移動し「モペツ」が使われるようになった。

8.2.2 鴻之舞鉱山

鴻之舞は紋別市の中心市街地から約 25km 程度離れた地点にあり、この地を含めたオホーツク海側では、明治 30 年代頃に砂金が発見され、「ゴールドラッシュ」となった。その中でも鴻之舞鉱山は金・銀・銅などを産出し、特に金の埋蔵量においては、佐渡金山・菱刈金山に次ぐ日本で第 3 位の産金の実績であった。鉱山の発展に合わせて、鉱山労働者とその家族の居住する街区が、藻鱚川・道道に沿って形成され、最盛期（1942 年頃）には人口約 15000 人を数えるまでになった。しかし、1943 年には戦争の激化による産業統制の一環として金は不要不急の鉱物とされたうえに、鉱山労働者が次々と徴兵され、一時的に地域の人口は激減し、ついには操業に支障をきたすようになった。第二次世界大戦後、1948 年に操業を再開したが金価格が下落し、資源も涸渇したことから、1973 年には閉山が決まった。操業開始から 1973 年の閉山まで、金 72t と銀 1234t をも産出した。

現在、鴻之舞鉱山周辺は、木製の構造物は既に朽ち果て、集落もないが、大煙突、発電所跡、学校の側壁跡などのコンクリートやレンガ製の構造物が藪や林の中に散見される。また、鉱山があったことを示す碑、鉱山犠牲者の慰霊碑が建立されている。

博物館内では、後ほど 8.3.3 で紹介する「ヤマ 紋別の鉱山」スペースにおいて、当時の様子や資料を見ることができる。

図 8-1 1954 年夏頃の鴻之舞鉱山



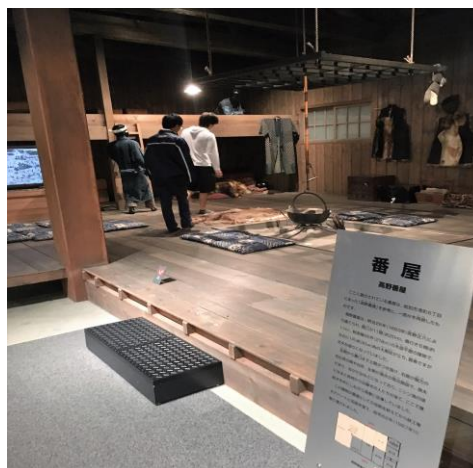
出所：鴻之舞金山跡周辺観光活用検討現地視察会 HP

8.2.3 高野番屋

高野番屋は、1893年に高野庄六により建てられた木造平屋の建物で、当時は漁夫やニシン漁の出稼ぎの人たちが来る宿泊施設として存在していた。そのため総面積は66坪（218㎡）と広く、質素ではあるが丈夫な造りになっていた。番屋としての役目を終えてからは鉄工場やアパートと役割を変え1987年に取り壊された。

博物館内では、次の8.3.1で紹介する「ハマ紋別の漁業」スペースにおいて、その形が当時の臨場感たっぷりに再現されていて、図8-2のように実際に中に入ることができ、当時の人々の生活の様子を間近で見ることが可能になっている。

図 8-2 高野番屋の再現展示



筆者撮影

8.3 展示内容

8.3.1 ハマ 紋別の漁業

紋別の漁業は、昭和30年代半ばまでに、大型漁業を中心とする全国でも稀に見る近代的な水産都市が形成された。この展示スペースでは主にその時代までに焦点を当て、たくさんの漁具や当時の生活が紹介されている。

漁業模型による様々な漁の方法の説明、操業状況の映像、漁船の模型やカワサキ船の1/3模型や各種漁業資料がわかりやすく展示されているだけでなく、ニシンの群れが網にかかる様子を光ファイバーで表現したり、天井には漁船の大型模型を吊るすなど、ダイナミックな展示も見どころのひとつとなっている。先述した、復元された高野番屋には当時の人々が実際に使用していた道具がそのまま使用されているため、より臨場感の増した展示を見ることができ

図 8-3 漁業資料展示



出所：紋別オホーツクランド HP

図 8-4 漁師気分を満喫する片原



岩谷楓香撮影

8.3.2 オカ 紋別の農林業と生活

ここでは紋別において、漁業とならぶまちの基幹産業として歩み続けてきた農林業と日常生活が、旧石器時代から現代まで紹介されている。

畑作や酪農に使われたプラウやクワ、集乳缶、馬の装蹄具、造材に使われた各種ノコやトビ、ガンタなど、開拓時代の紋別の農業や林業を支えてきた様々な道具、台所用品、ランプ類、ラジオなど、暮らしで使われた生活用具（日用品）が展示されている。また、北国ならではの雪下駄や、コムケ湖岸遺跡などから発掘された石器や土器など、レトロで地域性の高いものも並んでいる。特に、縄文時代やアイヌの人々の生活を 1/50 スケールのジオラマでリアルに表現した展示や、昔の農作業を体験できるコーナーは必見だ。

図 8-5 生活資料展示

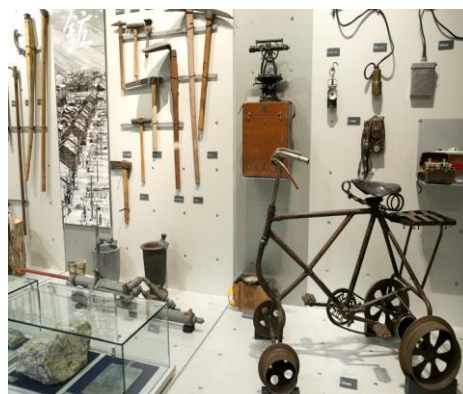


出所：紋別オホーツクランド HP

8.3.3 ヤマ 紋別の鉱山

八十士^{やそし}砂金から東洋一といわれた鴻之舞金山にいたる金山の歴史をメインに、模擬坑道や映像を用いて紹介されている。鴻之舞の鉱石や金・銀インゴット、八十士砂金、実物資料なども大量に展示されている。これらに加えて、等身大の人形やトロッコで、採掘風景や八十士川での砂金採りの様子を再現していて、活気あふれる町の様子も見ることができる。にぎわっていた町が閉山後、消えていく経過にふれると、寂しさとともに歴史のロマンも感じることも間違いなさそう。

図 8-6 鉱山資料展示



出所：紋別オホーツクランド HP

8.3.4 収蔵展示室

紋別の自然・歴史・文化・産業・生活などの数え切れないほどの実物資料が、テーマ別に収蔵展示された開放型のコレクションスペースである。筒型郵便ポストや磁石式電話交換機をはじめ、懐かしい、そして珍しい品々が所狭しと並び、アンティーク好きにはたまらない魅力的な空間になっている。

なかでも見どころは、鴻之舞金山のジオラマである。陸上の町のように、その地下に掘られた坑道を表したもので、どれほど深く、どれほど広範囲に坑道が広がっていたかが一目でわかるようになっている。地下に張り巡らされるように掘られた坑道の数から、

「東洋一」といわれた規模を実感することができる。

また、個々の収蔵品はコンピューターシステムで検索することもでき、サイズや寄贈者などのデータが閲覧可能なだけでなく、アイヌ語で名称が付いているものに関しては、それも併記されている。

入り口には、紋別周辺やオホーツク海で見られる動物のはく製がズラリとお出迎えしてくれていて、特にアザラシやオオカミは迫力満点であった。触れることもできるので、実際に毛並みなどを肌で感じてみるとよいだろう。ちなみに展示室前にあるトドのはく製は記念撮影スポットとして知られているので、ぜひ写真を撮っておこう。

図 8-7 収蔵展示室内



出所：紋別オホーツクランド HP

8.3.5 博物館学習スペース（市民ギャラリー・郷土学習室・工芸室・窯室）

市民ギャラリーでは、けん玉やお手玉、コマ回しといった昔遊びができるようになっている。また、紋別市に関する数多くの資料が展示されていて、ここを訪れたならば紋別の昔と今、その全てを知ることが出来ると言っても過言ではない。

特に、紋別市の歴史を豊富な写真と資料をもとに編さんした「新修紋別市史」は、先史時代から 2003 年までの歴史のあらましを、新たに掘り起こされた史実など加えながら通史的に概説するとともに、各分野にわたり多くの資料に基づき詳細に記述しており、後世への貴重な歴史書として、紋別の歴史を深く知ることができる内容となっている。興味のある方はご購入いただきたい。

他にも、工芸室と窯室では毎月イベント（主に子供向け）が開催されているなど、今ではなかなかできない貴重な体験をすることができるので、紋別に立ち寄る機会があれば、このイベントの開催に合わせて来てみるのも面白いだろう。

図 8-8 市民ギャラリー



出所：紋別観光振興公社 観光事業化 HP

8.3.6 まちなか芸術館（ふるさと芸術館・まちなか交流室・多目的ホール）

紋別を代表する 2 人の芸術家と
例えば、流水画家の村瀬真治、彫
刻家の齊藤顯治の名が挙がる。

村瀬氏は高校の美術教師として
紋別に赴任し、初めて見た流水に
魅了されて以来、油絵で流水を描
き続けた画家である。試行錯誤を
重ね、流水の美しさや冬の空気感
をデフォルメした形と色彩で表す
独自の画風を確立した。幻想的な
作品は、流水を厄介者と思っていた
市民の心を動かし、現在の流水
観光に繋がるきっかけにもなった。

図 8-9 ふるさと芸術館



出所：紋別オホーツクランド HP

一方、齊藤氏の作品の金属や石で作られた抽象的な形は、どれも自然からインスピレーションを得たものであり、市内の景色に溶け込むように展示されているものも少なくない。雨風にさらされて、さらに味わい深くなった作品を、市内で探してみるのもおもしろいかもしれない。

まちなか芸術館では、この 2 人の作品を中心に、紋別ゆかりの芸術家の作品を展示している。オホーツク紋別、「街の中」から郷土の芸術・文化を発信する生涯学習や街の中の交流の場として活用されている。また、329 m²の多目的ホールは、全国規模の展覧会や各種イベントの開催が大いに期待されている。

参照 HP

・朝日新聞デジタル

<http://www.asahi.com/area/hokkaido/articles/MTW20170501011580001.html>

・鴻之舞金山跡周辺観光活用検討現地視察会

<http://www.okhotsk.org/news/kounomai.html>

・紋別オホーツクランド HP

<http://mombetsu.info/city-museum/>

・紋別観光振興公社 観光事業課 HP

<http://mombetsu.net/>

・紋別市 HP

<http://mombetsu.jp/sisetu/bunkasisetu/hakubutukan/>

・紋別を知ろう！感じよう！個性的な展示の紋別市立博物館 | JTRIP Smart Magazine

https://www.jtrip.co.jp/magazine_hokkaido/article/sight/14918/